

講話「鳥取県出身の国文学者 池田亀鑑について」

鳥取県立図書館郷土資料課 学芸員 佐藤統一

はじめに

池田亀鑑は、国文学研究者の中では広く知られる存在であるが、一般にはほとんど知られていない。研究者となる前には、溝口尋常高等小学校（現伯耆町立溝口小学校）に教員として2年間勤め、小説家大江賢次は亀鑑の教え子として自他ともに認める存在であるなど、こちらの方が有名な話ともなっている。

しかし、「源氏物語」の研究に欠かさない研究業績を残した郷土人物について、「池田亀鑑賞」を主宰（町及び文学碑を守る会）する郷里日南町や記念碑が建つ伯耆町以外では知られていない状況であり、今少し詳しく知る機会としたい。

1 出生から研究者までの道のり

明治29年12月9日、日野郡福成村（現日南町神戸上・かどのかみ）に生まれ、大正7年に22歳で上京、大正12年に東京帝国大学文学部国文学科に入学し、卒業は30歳の年である。

（鳥取期）教員 「郷土読本」（1917※編著）

（上京期）編集者、小説家 稼業としての実業之日本社の編集者、少年少女向け小説作家『馬賊の唄』ほか（ペンネーム：池田芙蓉、青山桜洲など）

2 国文学研究者として - 手掛けた仕事 -

師範学校、各大学の教員・教授を務め、東京帝国大学教授となるのは昭和30年（59歳）であり、翌31年12月19日に60歳で急逝する。研究人生は凡そ30年であり、この間100点ほどの著作をなしている。

- ・学位請求論文『古典の批判的処置に関する研究』で「土佐日記」の本文研究
- ・「伊勢物語」、その他の物語文学の研究と入門書、普及書の執筆
- ・教科書の監修 「二年生のこくご」（学校図書、1951※監修）、「標準小学国語 三の上」（教育出版、1958※監修）、ほか

3 源氏物語研究の中で

【最初の本格的な研究事業】

- ・大正15年～16年にわたる『校異源氏物語』編集事業（芳賀矢一博士記念会委嘱）昭和17年完成
- ・『校異源氏物』（本文の校異編）、『源氏物語大成』（校異編、索引編、研究編、資料編、図録編）、『源氏物語事典』
・・・江戸時代の注釈書「湖月抄」からの脱却、本文最善本の考究
- ・「紫式部学会」創立関与（昭和7年）、『むらさき』創刊（昭和9年）及び編集
- ・「源氏物語」新作歌舞伎への協力
- ・「桃園文庫」（現東海大学附属図書館「桃園文庫」） 古典文学等の資料を収集 ※国文学研究資料館DB順次公開

4 人となりと顕彰について

- ・随筆 原稿用紙2000枚に及ぶという。随筆集『花を折る』には、約700枚分が選集される（大山、日野川のことなども記される）
- ・人となり 追悼文や述懐のことばからは、古典文学研究への熱量が大きい、「生涯稽古」、合理的でまっすぐな人「至誠」、人間味と情感

5 読み継がれる源氏物語と池田亀鑑

- ・基礎研究の確立 科学的な手法による古典文学本文研究（文献学）へのアプローチ
 - ・研究成果の活用 一つの成果が50年以上にわたり利用され、本文校本、事典等が参照されている
 - ・亀鑑の研究の克服 現在の新たな国文学研究においても、批判の対象であり続けている
- 「源氏物語」をはじめ、古典文学の幾つもの作品を研究し、入門書なども多数執筆

【参考文献】郷土出身文学者シリーズ8『池田亀鑑』（鳥取県立図書館、2012）

【参考資料】

○池田亀鑑の研究の側面

科学的体系的な本文研究を通じ、本文を整理

→ それにより、本文の伝来や文章・語句の異同等についての検討により、写本系統の体系的な整理がなされた

→ 一方で、画期となる校本の作成、校異の提示により、本文研究が停滞、亀鑑の研究成果を無批判に選択

その後の研究史

→ 亀鑑の研究成果を克服する個別研究、検討を要するとして「別本」と整理していた写本群の研究や新資料の発見

等による新たな知見により、亀鑑が提示した分類や系統と異なる整理区分について言及が見られる

→ 国文学研究者からも研究成果により、本文研究が停滞したことへの反省が見られる

★本文研究とは

使用される字句や、内容が変わるほどの文章の変更（本文の転化）を科学的に検証する

（例）書き物伝言ゲームをイメージすると・・・

写本A あいうえお（本来の文章） → ※写本B～Dは成立順とする（伝来情報）
 写本B あゐうえお 写本Aとは異なる本文である
 写本C あゐうゑお 写本Bからの写本可能性がある
 写本D あいうゑお 写本Aか写本Bからの写本の可能性

○略年譜（郷土文学者シリーズ8巻「池田亀鑑」より転載・加工）

明治 29 年	0	12 月 9 日、鳥取県日野郡福成村大字神戸上村に池田家長男として生まれる。
明治 36 年	7	4 月、日野郡神戸上尋常高等小学校に入学。
明治 40 年	11	3 月、神戸上尋常高等小学校尋常科卒業。4 月、同小学校高等科に入学。
明治 41 年	12	6 月、日野郡日吉尋常高等小学校に転校。尋常科 6 学年に編入。
明治 42 年	13	3 月、日吉尋常高等小学校高等科卒業。池田侯爵家奨励賞を受ける。
明治 44 年	14	4 月、鳥取県教育会講習所に入所。
明治 45 年	15	3 月、同講習所乙種課程を修了。尋常小学校准教員免許状を受ける。 4 月、鳥取県師範学校第一部に入学。
大正 5 年	20	3 月、同校本科第一部の課程を卒業。在学中、操行学業優秀により池田侯爵奨学賞を受ける。小学校本科正教員免許状を請け、鳥取県日野郡溝口尋常高等小学校訓導に任ぜられる。
大正 7 年	22	4 月、東京高等師範学校本科第二部に入学。
大正 8 年	22	この頃から池田芙蓉等のペンネームで少年少女向きの小説を多く発表。
大正 12 年	27	4 月、東京帝国大学文学部国文学科に入学。
大正 15 年	30	3 月、東京帝国大学文学部国文学科卒業。卒業論文「宮廷女流日記考」。 4 月、芳賀矢一博士記念会の事業として源氏物語注釈の編者を依託される。 6 月 18 日、東京帝国大学副手を囑託される。 7 月 15 日、前田侯爵家育徳財団より古書籍古文書図画の複製に関する事務を囑託される。
昭和 2 年	31	2 月、最初の著書『宮廷女流日記文学』を刊行。この頃から実業之日本社員となり「婦人世界」の事実上の編集長となる。
昭和 6 年	35	岩波講座日本文学編輯委員となる。
昭和 9 年	38	東京帝国大学文学部助教授に任ぜられる。
昭和 16 年	45	学位論文「古典の批判的処置に関する研究」を提出、学位請求の手續をおわる。
昭和 17 年	46	11 月、芳賀矢一博士記念会より依託された『校異源氏物語』五巻を完成、芳賀矢一の御霊前に供え、記念会員全員に報告。
昭和 23 年	52	文学博士号を授与される。